

保育者を目指す学生にとっての特別支援学校教育実習の意義

奥村香澄^{1*}・藤川雅人¹・郡司竜平¹・安永啓司²

1 (名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科)・2 (聖学院大学人文学部 児童学科)

キーワード：特別支援学校教育実習，保育者養成校，KH Coder，テキストマイニング

1. はじめに

厚生労働省の調査によると、平成22年では障害児保育の実施か所数が13,950か所あったが、令和2年度では19,965か所に、実障害児数は平成22年では45,369人、令和2年度では79,260人と実施か所数、実障害児数ともに増加傾向がみられる。また、平成20年にベネッセが行った調査によると、障害のある幼児や特別な支援を要する園児が国公立幼稚園では66.8%、私立幼稚園では50.0%であった。平成30年の調査になると、それぞれ92.9%と80.6%であることから、障害のある幼児や特別な支援を要する園児の数は増加傾向にあるといえる。これらのことから、保育所、幼稚園ともに障害のある幼児または特別な支援を必要とする幼児の人数が増えていると推測される。

保育者養成校において、障害のある子どもについて学ぶことのできる講義には、「障害児保育」や「施設実習(II)」などを挙げることができる。このうち、平成22年3月「保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)案」において、保育士養成課程の必修科目に「障害児保育」が1単位から2単位に増えており、近年の保育現場における現状に即したカリキュラムの変化が求められているといえる。また、保育者養成課程の4年制大学の中には、幼稚園教諭免許状を基礎免許として、特別支援学校教諭免許状を取得することができる大学も設置されている。特別支援学校教諭免許状を取得するためには、障害種(視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱)に関連する講義や特別支援学校教育実習を受講する必要がある。従来の「障害児保育」では、それぞれの障害種について、詳細に学ぶことができなかったものの、特別支援教育教員免許状を取得するために必要な単位では、「特別支援教育の基礎理論に関する科目」や「特別支援教育領域に関する科目」など、特別支援教育の教育制度や歴史、指導法などについて学ぶことができる。

池田・小川・武石(2011)では、幼稚園教諭養成課程に在籍して、特別支援学校教育実習を選択した学生では、実習に対して、「かなり満足した」および「少し満足した」を合わせると92.5%であったことを報告した。「満足した」の内容として、「子どもとのかかわり」、「授業の楽しさ」、「学びの充実」、「特別支援教育への理解」、「経験の拡大」が挙げられていた。「実習を通して自分が成長したと思うこと」については、「子どもとのかかわり」、「子どもの理解」、「視野の拡大」、「諦めない気持ち」などにグルーピングできるとした。先行研究からも、幼稚園教諭養成課程において、特別支援学校教育実習を選択することによって、障害の有無にかかわらず、子どもへの理解を深められることが期待されると考えられる。

前述したように、特別支援学校教育実習において、障害児への理解や知識の深まりだけではなく、定型発達児への理解も得ることができると考えられる。これらの知識や経験をもとに、近年増加傾向にある障害のある幼児への理解や保育における支援を考えることのできる保育者は現場においても、有益な存在になりうるといえる。

本研究では、保育士・幼稚園教諭養成課程に在籍する特別支援学校教育実習を終了した4年生を対象に、アンケート調査を行った。これらの結果をもとに、保育者養成校において、保育者を目指す学生自身が特別

*責任著者

奥村香澄 kokumura@nayoro.ac.jp

支援学校教育実習にどのような意義を感じるのかについて明らかにすることを目的とする。

2. 方法

1) 対象者

20xx 年から 20xx+3 年までに A 大学の保育者養成校に在籍した 4 年生のうち、4 年次に「特別支援学校教育実習事前事後指導」を受講し、特別支援学校教育実習を経験した計 84 名を対象とした。

2) 調査項目

特別支援学校教育実習終了後に、「あなたにとって、特別支援学校免許状の取得はどのような意味や意義があると思いますか」について自由記述にて回答を求めた。

3) 分析方法

テキストマイニングソフトウェア KH Coder (Ver. 3. Beta. 04c) を用いて計量テキスト分析を行い、アンケートの結果を可視化した。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う方法である(樋口, 2006)。KH Coder は、樋口耕一が開発したテキストマイニングのためのフリー・ソフトウェアである。分析では、抽出された語に対して、上位頻出語および、共起ネットワーク分析を行った。なお、実習先が、幼稚園、小学部、中学部、高等部と多岐にわたるため、実習先によって「子ども」を示す用語が「幼児」、「児童」、「生徒」などと異なる。本稿では、用語を統一するために、「児童」、「生徒」、「幼児」、「子供」を「子ども」に、「障害児教育」を「特別支援教育」に事前に修正したうえで、データの分析を行った。

4) 倫理的配慮

アンケート配布時に、(1) アンケートは自由に記述していいこと、(2) アンケートの内容は授業の成績に影響しないこと、(3) アンケートへの回答をもって研究への同意となること、について周知した。アンケートの分析は該当する対象者が卒業後に行った。

3. 結果

1) アンケートの回収率

回収率は 98.8%であった。

2) KH Coder による分析結果

総抽出語数(使用) 7,067 (1,631)、異なり語数(使用) 727 (349)であった、文章の単純集計では、文 220、段落 82 であった。

(1) 上位頻出語

表 1 に頻出語を出現回数の多い順に、上位 60 位までを示した。上位の頻出語として、「子ども」、「保育」、「障害」、「実習」、「関わる」、「学ぶ」、「支援」などが抽出された。

表1 アンケート自由回答における上位頻出語一覧

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	134	働く	14	関係	7
保育	80	見る	13	講義	7
障害	65	実態	13	配慮	7
実習	56	先生	13	活かす	6
関わる	44	学べる	12	寄り添う	6
学ぶ	43	就職	12	指導	6
支援	37	意義	11	生かす	6
取得	30	意味	11	伝える	6
免許	30	学び	11	保育園	6
特別支援学校	29	広がる	11	教員	5
特別支援教育	27	行う	11	携わる	5
自分	26	視野	10	考え	5
現場	22	対応	10	行動	5
関わり	21	気持ち	9	資格	5
教育	21	考え方	9	実践	5
行く	21	得る	9	取れる	5
理解	21	学校	8	専門	5
知識	18	機会	8	増える	5
持つ	16	教諭	8	捉える	5
知る	16	向き合う	8	大学	5
幼稚園	16	自身	8	把握	5
経験	14	生かせる	8	有無	5
視点	14	方法	8	幼児教育	5

(2) 共起ネットワーク分析

共起ネットワーク分析の結果を図1に示した。共起ネットワーク分析の結果、8つのグループに分けることができた。8つのグループとして、①「子ども・障害児の理解」、②「実習から得た学び」、③「視点・視野の拡大」、④「支援方法の気づき」、⑤「多様な関わり方」、⑥「将来に生かせる学び」、⑦「実習の意義」、⑧「保育現場への応用」に分類した。表2にそれぞれのグループの名称と自由回答例について示した。

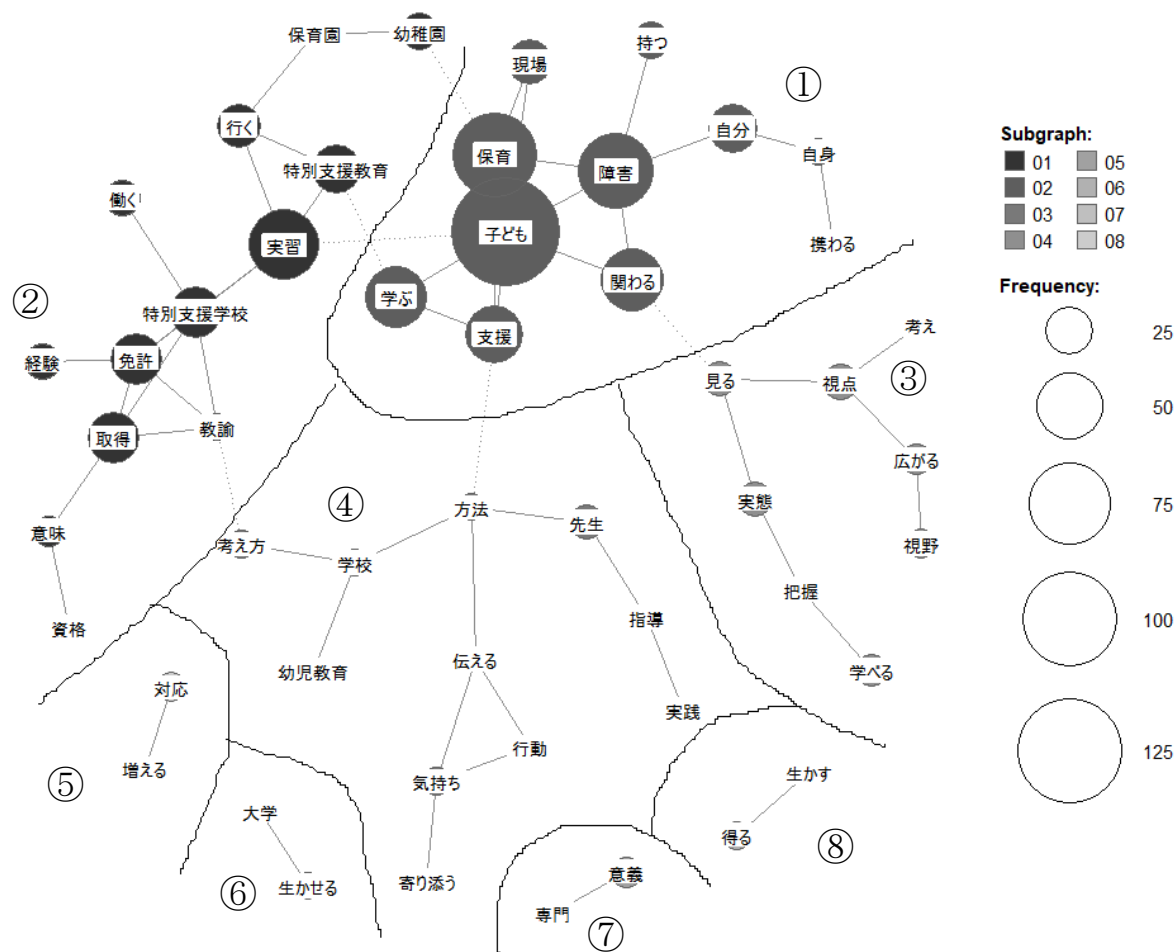


図1 抽出語の共起ネットワーク分析の結果

①「子ども・障害児の理解」では、「障害の有無に関わらず、子どもの実態を把握することは大切であり、その子どもに合った支援が必要とされるため、そのことをしっかり実習を通じて学ぶことができました。」や「障害のあるなしに関わらず、偏りなく子どもを見たり、接することができる。」など、障害の有無に関わらず、子どもの実態を理解したり、気づくことの大切さについて記述されていた。

②「実習から得た学び」では、「特別支援学校にいる子どもは一人一人の実態が異なるため、どのような支援がその子どもに合っているのか、個別に対応や課題を考えていくことが大切だと学んだ。」や「実習をして、障害と向き合う大切さや配慮の仕方など、資格取得よりも大切なものを得たと思う。」などの特別支援学校教育実習で得た学びに関する記述が多く見られた。

③「視点・視野の拡大」では、「障害のある子どもを見る視点や、関わり方についての引き出しが増えることで、対応したり、アイデアを出すことができ、通常の保育現場でも保育が豊かになるきっかけになる。」や「子どもに伝わらなかった時、どのようにしたら伝わるかなど実習の中で考えることが多く、一方的な関わり方だけでなく、多方面から子どもを捉えて様々な関わりをしていくことの大切さを学び、保育をする中でも広い視野を持ち多面的に子どもを捉えていくことを心がけたいと思った。」など、自身の視野や視点の拡大について述べられていた。

④「支援方法の気づき」では、「特別な支援が必要な子どもの特徴や支援方法を学ぶことで、保育所や幼稚園でグレーゾーンの子どものための関わり方を考えられる。」や「支援を必要とする子どもがいなかったとし

でも、みんながわかりやすいような教え方、伝え方を学べたと思う。」など具体的な支援方法への気づきが記述されていた。

⑤「多様な関わり方」では、「子ども一人一人実態が違い、その子に応じた対応を先生方はしており、一人一人に応じた対応をすることの大切さを学んだ。」や「保育が多様化していく中で、様々な子どもに対応することになるとと思いますが、現場に出る前に知識の土台を持っておくことが大切だと思いました。」など障害の有無に関わらない子ども全般に対する関わり方についての記述が見られた。

⑥「将来に生かせる学び」では、「大学卒業後、子どもに関わる、障害のある人に関わる、職業に就く、就かないに関係なく、今度の人生に生かせるもの。」や「自分が就職した際、障害を持っている子どもと関わる場面は絶対にあると思うので、そのような時に学んだことを生かせると思う。」など実習から将来に得られた知識や経験についての記述が見られた。

⑦「実習の意義」では、「一人一人の子どもをよく見て、よく知って、関わることの大切さを学ぶことができる点で意義があるとも思います。」や「障害に対する考え方、支援方法、声かけなど、保育に活かせる部分がたくさんあるので、保育者を目指していても大きな意義があると思います。」などの子ども理解や保育現場への還元も含めた意義の記述が見られた。

表2 各カテゴリーにおける自由回答例

グループ	自由回答例
①子ども・障害児の理解	障害と向き合う大切さや配慮の仕方など、資格取得よりも大切なものを得たと思う。 障害への配慮を特別なものではなく、ごく普通のことだと思えるようになった。 障害の有無に関わらず、子どもの実態を把握することは大切であり、その子どもに合った支援が必要とされるため、そのことをしっかり実習を通じて学ぶことができました。 保育現場で気になる子や障害を有する子どもがいた場合、これまでの講義や実習で得た知識や支援を十分に生かすことができると思います。
②実習から得た学び	実際に実習に行ってみて、すごく大変だったけど、特別支援教育でしか学べないことがたくさんあったので、勉強になったし、行ってよかったと思います。 特別支援教育の知識を持っていることで別の視点からの援助ができ、保育の幅も広がっていくことにつながると思います。 実習に行き特別支援教育について深く知れて、もっと学びたいという気持ちになった。 免許を取得するという結果はあるが、それまでの過程で本当に大切なことを学べたので、取得することの意味はもちろん、将来の視野も広がるが、大切なことを学べたというところにあると思う。
③視野・視点の拡大	広い視点、視野で子どもを見ようと思えることができる。 特別支援教育について学ぶことで、多くの視点で子どもを捉えたり、よりわかりやすい方法で伝える力が身につくと思う。 就職に向けて視野が広がる。 保育所、幼稚園では見ることのできない少人数に複数の担任という形態で一人一人に合わせた支援を行うということの重要性を体験することで感じることもできた。
④支援方法の気づき	特別な支援が必要な子どもの特徴や支援方法を学ぶことで、保育所や幼稚園でグレーゾーンの子どものための関わり方を考えられる。 実習で特別支援学校の先生の子どものための関わり方、指導の方法を見るだけでも大きな学びになるし、保育だけではなく、子どもと関わる上での実態把握等も実践的に学べる。 子ども一人一人実態が違い、その子に応じた対応を先生方はしており、一人一人に応じた対応をすることの大切さを学んだ。 支援を必要とする子どもがいなかったとしても、みんながわかりやすいような教え方、伝え方を学べたと思う
⑤多様な関わり方	障害のある子どもを見る視点や、関わり方についての引き出しが増えることで、対応したり、アイデアを出すことができ、通常の保育現場でも保育が豊かになるきっかけになる。 関わり方が広がったことで、様々な子どもに対応できる保育者になるという意味があると思う。 気になる子と言われる子どもが今増えてきているように思うので、幼稚園や保育所で障害を持っている子どもがいたときに対応して、工夫を考えていく力がついたように思います。
⑥将来に生かせる学び	実習をしてみて、この関わりは特別支援教育に限らず、普通に定型発達の子どものための生かせると思える学びがたくさんあった。 就職は保育所でも、実態に生かせることがあるし、子ども一人一人を理解することがいかに大事かわかったので、本当にいい経験になった。 大学卒業後、子どもに関わる、障害のある人に関わる、職業に就く、つかないに関係なく、今度の人生に生かせるもの。 大学で学んだことや知識を持っていれば、そのような方々の力となることができると考えています。
⑦実習の意義	一人一人の子どもをよく見て、よく知って、関わることの大切さを学ぶことができる点で意義があるとも思います。 障害に対する考え方、支援方法、声かけなど、保育に活かせる部分がたくさんあるので、保育者を目指していても大きな意義があると思います。 障害を持つ人と関わる機会が自分には今まであまりなかったため、障害者に対する理解を深めたり、自分の視野を広げるという意義があったと思う。 学びの幅を広げ、専門性を高める意味があると感じています。
⑧保育現場への応用	実態に対して何が必要なのか、どのような手立てが効果的なのか、考えていくことが大切だということを自分の視点として得ることができた。 他の実習では得ることのできないチームティーチングの大切さや、丁寧な関わり方を深く学ぶことができる。 今回の学びは幼稚園でも生かすことができると思った。 特別支援教育を学ぶ中で得た、視点や考えを生かしていきたいと感じた。

⑧「保育現場への応用」では、「保育現場で気になる子や障害を有する子どもがいた場合、これまでの講義や実習で得た知識や支援を十分に生かすことができます」と思います。」や「特別支援学校の先生はすごくチームワークがあって、互いの長所を生かしたり、何事も相談しあって決めたりというのが印象的でした。」などの特別支援教育や特別支援学校の特徴や特色への気づきやそれらの気づきを保育現場にも応用可能であるとした記述が見られた。

4. 考察

本研究では、保育者養成校における特別支援学校教育実習の意義を「子ども・障害児の理解」、「実習から得た学び」、「視点・視野の拡大」、「支援方法の気づき」、「多様な関わり方」、「将来に生かせる学び」、「実習の意義」、「保育現場への応用」の8つにグルーピングすることができた。池田ら（2011）同様、特別支援学校教育実習を経験することによって、障害の有無に関わらない子ども理解を促進すること、新たな視野を獲得することが可能であったと考えられる。

池田・小川・武石（2012）は、特別支援学校教育実習にて指導教員を経験した教員に対してアンケートを実施した結果、「実習生に対する指導内容」では「子どもへの関わり方」が89.7%、次いで「子どもの理解の方法」が62.1%であったことを報告した。また、今野・池田・小川（2016）においては、指導教員の「充実感」の内容として、「実習生の姿勢・態度」に次いで、「実習生の子ども理解」が挙げられていた。これらの先行研究から、特別支援学校教育実習においては、「子どもの関わり方」や「子どもの理解の方法」の指導が重視されており、指導教員自身も実習生が指導教員の指導を受けて、子どもを理解している姿を見ることによって、充実感が得られていると考えられる。

さらに、近年では、実践的指導力の中でもその基礎を支える「子ども理解」の力が特に重視され、教員養成段階の学生が子どもと関わる教育実践の機会が増えてきている（直井・村形・野口・奥住，2015）。本研究と今野ら（2016）のグルーピングを照らし合わせたところ、今野らの「子どもへの関わり方」や「多様な関わり方」といった項目は、本研究における「支援方法の気づき」、「多様な関わり方」、「子ども・障害児理解」に類似した項目であると考えられる。これらのことから、実習先の指導教員による指導内容や子どもと関わる機会そのものが、特別支援学校教育実習を行うことの意義に直接的に影響を与えている可能性があると推測される。

本研究では、「子ども・障害児の理解」のみならず、実習で得られた知識や支援方法を卒業後の保育現場に還元するといった「保育現場への応用」や「将来に生かせる学び」についても得ることができていることが明らかとなった。保育者にとって障害児に関わることでできる就職先として、特別支援学校だけではなく、地域の療育施設や児童相談所などが考えられる。また、地域の保育園や幼稚園においても多様な育ちの子どもが在籍しており、障害児に関わる機会は多くあるといえる。本研究では、障害の有無に関わらず、子どもへの理解がより深まったことが明らかとなっており、通常の幼稚園や保育所といった、保育者養成校出身の多くの学生が就職する場所においても、特別支援学校教育実習にて得られた経験を生かすことができると考えられる。これらのことから、保育者養成校において特別支援学校教育実習を行うことによって、保育者としての子ども理解や障害児理解を深めることができることに加えて、将来、保育現場で障害のある子どもに接する上で必要な支援方法についても、知る機会になりうると考えられる。

また、「保育現場での応用」については、ティーム・ティーチング（以下、T・Tとする）から得た学びについての記述が見られた。特別支援学校では児童生徒の能力・適性の多様さに応じるため、多様な学習グループの編成や独自の指導形態を設定する必要があることから、通常T・Tの指導方式で授業をすすめていく（渡邊・橋本・菅野・中村，2008）とされる。T・Tの有効性として、「個に応じた指導」に対応できることが期待されており、それには「個別指導」と「集団指導」の2つの指導の場があると考えられている（長谷川・

渡辺, 2008)。長谷川・渡辺 (2008) によると、集団指導の学習で個に応じた指導を効果的に進めるためには、学習の全体目標、個人目標、学習の方法、支援内容などの共通理解がなされ、教師間の連携・協力すなわち T・T が十分に機能することが課題となるとされる。渡邊ら (2008) では、実習生のタイプ別に実習カンファレンスを行い、T・T 指導の教示方法を実習生の特徴に応じて変えて行っている。また、実習生に対して、振り返りシートを用いて、実習生自身の自己評価を行った工藤・島田 (2022) によって、実習生の中には T・T の機能を理解するまでに至らずに研究授業を行うために、児童生徒を指導することに難しさを感じる事が報告された。さらに、実習生が T・T のような指導形態での授業、指導形式を効果的に機能させるための教員同士の連携について学修することができると実習指導を検討していく必要があることが示唆された。上記のように実習生を対象として T・T の理解やその指導法についても検討されており、実習生を指導する特別支援学校の教員にとっても、T・T は実習にて獲得してほしい知識や実践であると考えられる。一方で、実習生にとっては、T・T の本質を理解して、実習期間中に研究授業等を通してメインティーチャーとサブティーチャーとしての役割を担うことの難しさがあるといえる。しかし、T・T では集団指導と個別指導を並行して行うことのできる指導形態でもあることから、担任、副担任制の体制が多い幼児教育に応用することによって、様々な特別な教育的ニーズをもつ子どもへの集団指導や個別指導にも効果的な指導形態であると考えられる。

特別支援学校教育実習のない保育者養成校においては、保育者が特別支援教育の専門性を高めるために学ぶべきことや、体験型学習について検討されている (打浪, 2017)。このことから、特別支援学校教育実習を履修することによって、より具体的な体験をもとに保育者としての専門性を高めることができると考えられる。特別支援学校教育実習から得られた知識や経験の多くは、卒業後の保育現場に応用可能な知識や経験であり、その後の子ども理解に影響を及ぼすと推測される。このことから、特別支援学校教育実習は、特別支援学校教諭免許状の取得のみならず、今後の保育現場の現状に適した保育者の育成に有効な実習の一つになりうるといえる。

5. おわりに

本研究では、保育者養成校における特別支援学校教育実習の意義について、実習後のアンケートを計量テキスト分析によって明らかにすることを目的とした。今後、特別支援学校教育実習を経験した学生と経験していない学生を比較することによって、定型発達児や障害児への理解やその後の保育者としての対応が質的に異なるのか検討する必要がある。

謝辞

本研究のアンケートにご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

引用文献・参考文献

ベネッセ (2018) 第3回幼児教育・保育についての基本調査。

今野邦彦・池田浩明・小川透 (2016) 特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究 (3) —教育実習担当指導教員へのアンケート調査から—。藤女子大学紀要, 53, 73-80。

厚生労働省「各自治体の多様な保育 (延長保育、病児保育、一時預かり、夜間保育) 及び障害児保育 (医療的ケア児保育を含む) の実施状況について」<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/R2gaiyo.pdf> (最終閲覧日令和4年8月29日)。

工藤洸一邦・島田博祐 (2022) 特別支援学校における教育実習生への実習指導の在り方について—実習振り返りシートの分析を通して—。明星大学大学院教育学研究科年報, 6・7, 7-15。

長谷川裕己・渡辺明広 (2008) 特別支援学校 (知的障害) におけるティーム・ティーチングによる授業改善の試み—「ティーム・

ティーチングでの指導・支援の内容」表を活用した授業実践を通して－. 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 15, 83-92.

樋口耕一 (2006) 内容分析から計量テキスト分析へ－継承と発展を目指して－. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 32, 1-27.

池田浩明・小川透・武石詔吾 (2011) 特別支援学校の教育実習における学生の意識 (1) ー実習生の期待・不安・成長に関するアンケート調査からー. 藤女子大学紀要, 48 (II) , 125-131.

池田浩明・小川透・武石詔吾 (2012) 特別支援学校の教育実習における学生の意識 (2) ー実習校長及び教育実習担当指導教員へのアンケート調査からー. 藤女子大学紀要, 50, 89-93.

直井麻衣子・村形舞香・野口和人・奥住秀之 (2015) 特別支援学校教育実習における実習生の子どもの関わり場面と指導教員の介入の様相. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 II, 66, 251-257.

打浪文子 (2017) 保育学生への「特別支援教育」の教授法に関する検討. 淑徳大学短期大学部研究紀要, 56, 31-44.

渡邊貴裕・橋本創一・菅野敦・中村勝二 (2008) 特別支援学校における効果的な教育実習への実践. 発達障害支援システム学研究, 7 (1) , 19-29.